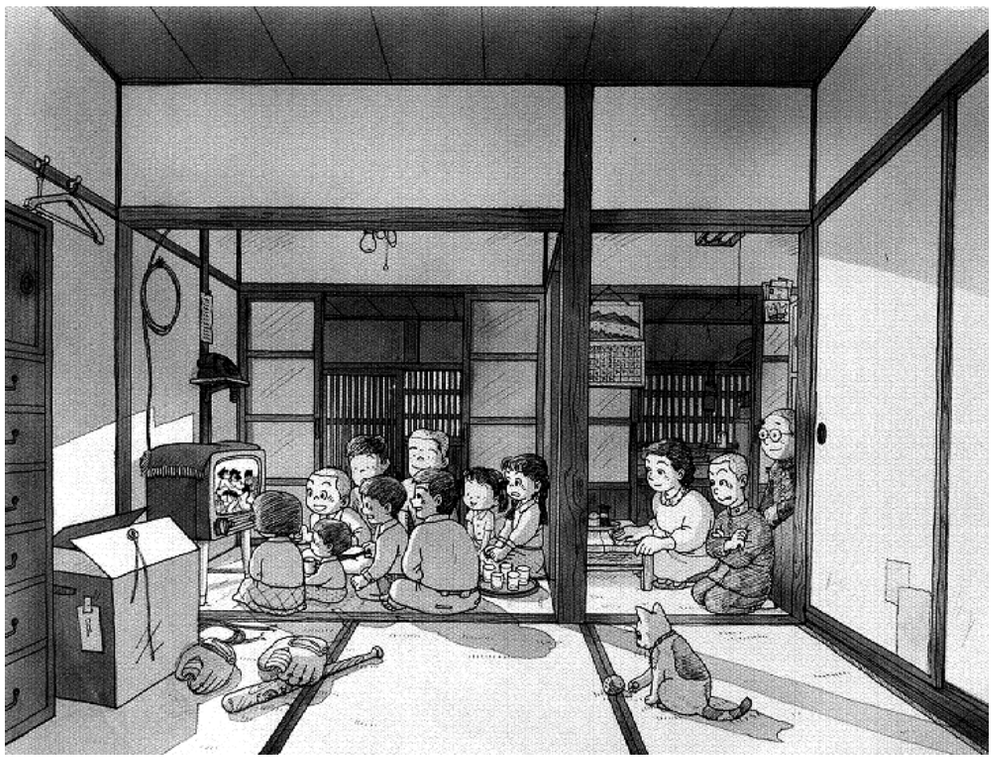
東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵＆文　柳 たかを

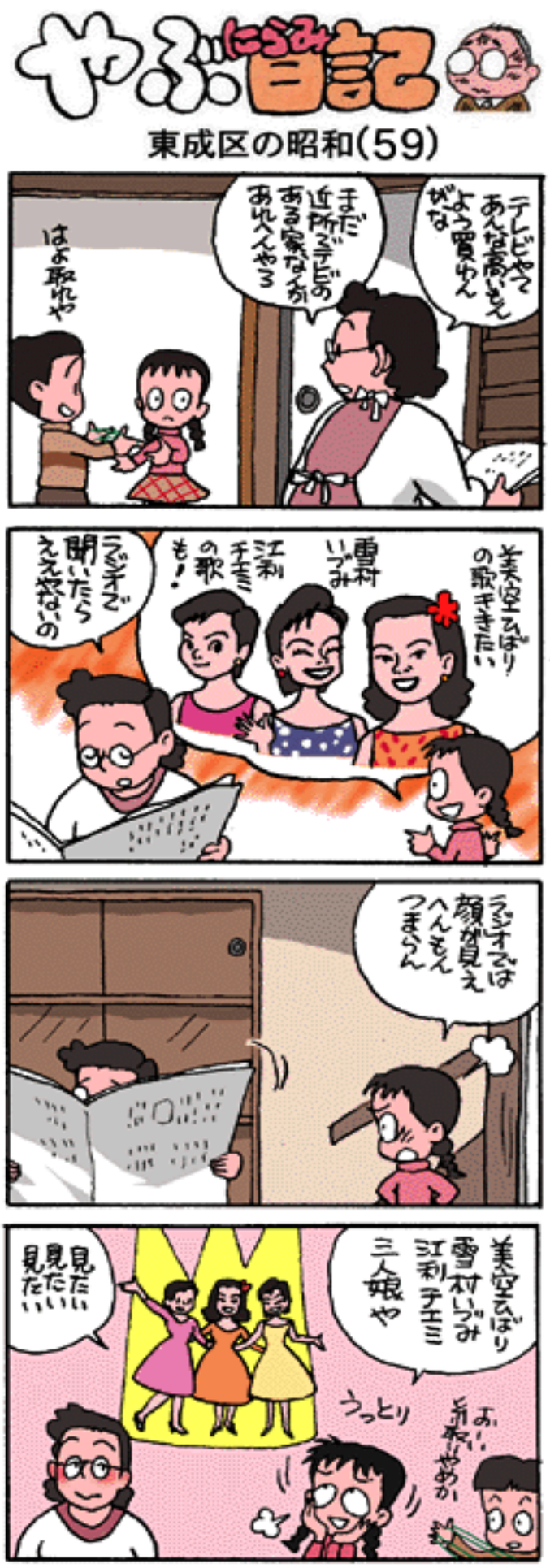
わが家にはじめてテレビが来た頃



当時の紙芝居業は、戦後の引揚者たちなど、職にありつけない男たちの日銭稼ぎ飢えをしのぐ為の非常職だった。
紙芝居業の元締めからその都度紙芝居を借り、子供らの集まる広場などで上演して日銭を稼ぐ。ただ法律で“見料”を取ることが禁じられていたので代わりに水飴・型抜き飴や酢昆布・煎餅などの駄菓子を 5 円 10 円で売って売り上げとした。紙芝居の借り賃と駄菓子の仕入れ代を差し引いたわずかな残りがおじさんの収入だった。

マンガ「東成区の昭和」に描かれている時代は、作者の記憶が残っている 4 ～ 6 歳、昭和 30 年頃。
テレビがわが家にやって来たのは作者が小学 3 年になった昭和 33 年春だと思う。
はじめてテレビを見たのは、その前年、友人宅で見せてもらった西部劇で、アメリカ騎兵隊所属の少年兵と相棒の軍用シェパード犬が主人公の「名犬リンチンチン」だった。
テレビ登場以前に子供たちをわくわくさせ楽しませてくれたのが紙芝居。
本作でも紙芝居を囲む懐かしい子供たちの風景を描かせてもらっている。
紙芝居鑑賞で思い出すのは、おじさんが夕刻鳴らす拍子木の音「チョーン、チョーン」、紙芝居大好きな作者は猛然と 100 メートルほど離れた公園にダッシュ。
おっとと、紙芝居を鑑賞するには駄菓子を買わないと見せてもらえない。
家で日本画を描く父にねだって 10 円硬貨を 1 枚もらい公園に駆けつけた。

ところが、この 5 円 10 円をもらえない子供もいて、その子らは紙芝居が始まると紙芝居を取り囲む集団から少し離れたところに立ち耳をそばだてている。
作者の子供時代にも、紙芝居のおじさんが突然しゃべりを中止し、何度かそうした子らに「あんたら、ただ見したらあかんで」と叫んだのを思い出す。
それを聞いてお金がない境遇のみじめさを想像し、胸が重く苦しいような気持ちになった。
やがて専業主婦だった母親が猛然と保険の外交員などの収入重視の仕事を始めたせいで、上に書いたように我が家にも 14 インチの白黒テレビがやって来る。
昭和の高度経済成長の幕開けだった。


やぶにらみ日記
東成区の昭和(59)
テレビやってあんなあいもんよう買わんがな
まだ近所でテレビのある家なんかあれへんやろ
はよ取れや
美空ひばりの歌ききたい
雪村いづみ
江利チエミの歌も！
ラジオで聞いたらええやないの
ラジオでは顔が見えへんもんつまらん
美空ひばり
雪村いづみ
江利チエミ
三人娘や
見たい見たい見たい
うっとり
おい！新取ってやあか

やぶにらみ日記
東成区の昭和(60)
なあタカオもテレビほしいやろ？ねえ
ボクおっきなったら紙芝居屋さんになんねん
そういう話やのうてね……
自分で紙芝居かいて紙芝居すんねん
エヘヘ
ホホホ
ありんめまいしてきた
ヨロッ
バタン

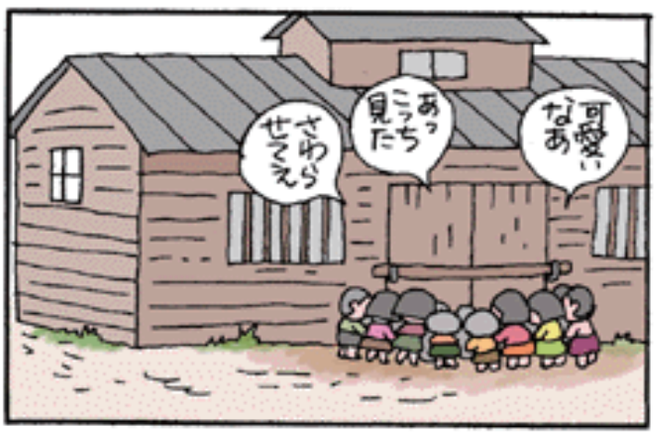
やぶにらみ日記

東成区の昭和(61)

東成区の昭和(62)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(63)



東成区の昭和(64)

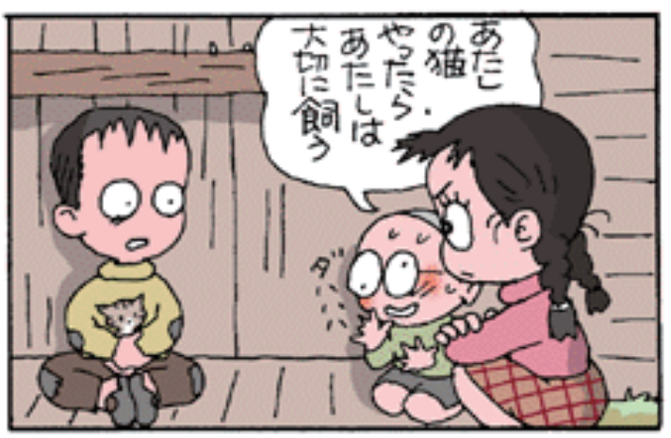
やぶにらみ日記

東成区の昭和(65)

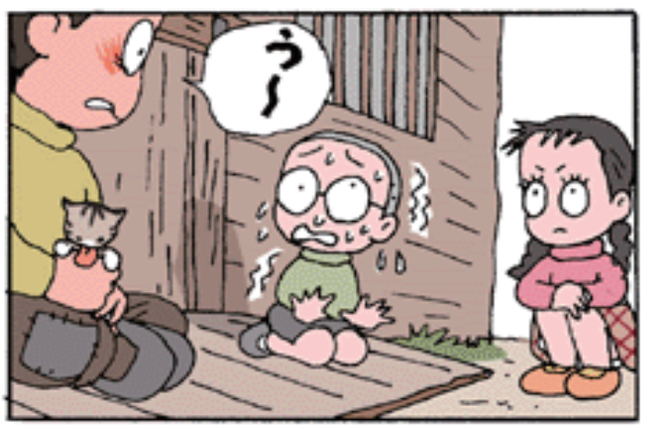
東成区の昭和(66)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(67)



東成区の昭和(68)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(70)

東成区の昭和(69)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(71)

東成区の昭和(73)